

5年間の任期中に「できた」ことと「できなかった」こと

岡田 哲郎

(元福祉学科教員)

はじめに

私は1998年（学部創設年）に入学して以来、学部生として4年、修士課程院生として2年、実習インストラクター（実習教育室勤務）として3年、博士後期課程院生として6年、そして2013年度に福祉学科の助教として着任し、5年間の任期満了を迎えた昨年度までの計20年間、コミュニティ福祉学部で立場を変えながら在籍してきました。長い年月を経る中で、母校というよりは「実家」のような感覚さえしていましたが、そんな私がようやく「コミ福」を巣立ち、今新しい環境に身を置いています。

母校で教員として勤めたこの5年間は、私の人生の中でかけがえのない時間でした。その時に「できた」ことと「できなかった」ことをまとめることで、在職中にお世話になった方々への御礼と、自分自身の振り返りとさせていただきます。

I. 5年間の任期中に「できた」こと

まず助教の任期中にできたこと、得たものを振り返ると、第一に、研修講師や行政計画の委員等を通じて、多くの福祉現場に関わらせて頂きました。具体的には、和光市、坂戸市、鳩山町、ふじみ野市、鴻巣市、本庄市、品川区、横浜市港北区等、主には埼玉県を中心とした首都圏の行政、社会福祉協議会、社会福祉法人等で仕事をさせて頂く機会が年間を通じてコンスタントにありました。これらは現場で活躍する「コミ福」の卒業生が声をかけてくださったものがほとんどであり、また、「立教大学」（あるいはコミ福）という看板が後ろにあって務めることができた役割であると思います。こうして頂いた「きっかけ」が、仕事やご縁として今につながっています。

第二に、日々の実践フィールドを得たことです。以前から先進的な実践をしているとその噂を耳にしていた「新座市北部第二地区地域福祉推進協議会」（通称「きたに」）に、立教大学に入職したことを機に、関わり始めました。「北部第二地区」は新座キャンパスも含まれるエリア（生活圏域）ですが、この地に転居し、今は運営委員として「きたに」の活動に参画しています。地域住民として日常的に活動（生活）して、自分がこれまで表面的あるいは客体的にしか「地域社会」を捉えていなかったことに気づかされました。

一言で表すと「面倒だけれど、可能性のある地域社会」を手作りしていく面白さ、これを地域福祉の研究者・教育者として、今後言語化していきたいと思います。

第三に、社会福祉士の実習教育に関しては、初年度から「地域福祉・公的扶助領域」の担当教員として経験を積ませて頂きました。これに関しては毎年の『実習報告集』に詳述しているため割愛しますが、この場を借りてあらためて、実習教育を通してお世話になりました一人ひとりの皆様に感謝申し上げます。また、福祉実習教育室所属の助教として、実習教育システムを維持・改善するための実務を学び、2016年度からの2年間は副室長の役割も務めさせて頂きました。これらの経験は、後述する現在の仕事にそのまま役立っています。さらにはこうした仕事はチームワークなしにできるものではないことを、福祉実習教育室のスタッフとの日頃の協力関係の中で学ばせて頂きました。

第四に、卒業研究指導のクラスを、最終年度に受け持つことができました。3年次の実習指導ゼミから継続の学生、他学科の学生、編入生と、出所が様々なこの5人のゼミ生達と過ごした1年もまた特別な時間でした。ゼミの成果として、学部の「地域連携・協働プロジェクト」助成金の採択を得て、高島町とコミュニティ福祉学部とで締結している「高島プロジェクト」と、その一部として展開されている「高島実習」（地域ケア型実習）の意義について、本ゼミで調査をし、『高島再発見！プロジェクトー「高島プロジェクト」の再活性化にむけてー』報告書にまとめることもできました。5人全員が無事卒業論文を書き上げ、それぞれの道で今、頑張っています。こうして学生の成長を卒業まで（また卒業後も）見届けられるのは、教員の醍醐味であると感じられました。

第五に、学部の「東日本大震災復興支援プロジェクト」を通じて、主には石巻市の活動に「細く長く」関わることができました。活動拠点である小規模多機能型居宅介護事業所「めだかの楽園」の方々とは、お互いに想い合える関係を築け、自然と「被災地」の現実を、少しずつ体に染み込ませて頂いたようでした。その経験は、首都圏でいざれ起こると言われる大規模災害や、超高齢社会に向き合う心構えにつながっています。また、学生支援担当教員として、学生支援団体「Three-s」に継続して関わりをもちました。被災地のフェイズが移り行く中、「復興支援とは何か？」悩みながら歩んでいく学生に寄り添えたことも、学生達の想いや力を間近に感じることができ、大変貴重な経験でした。

第六に、コミュニティ福祉学部への貢献です。2014年度から4年連続で「地域連携・協働プロジェクト」助成金の採択を頂き、本学部の生命線ともいえる「地域」との関係を多少なりとも深めることができました。また、学内学会「まなびあい」に、卒業生の観点も活かして参画しました。とりわけ、第7回年次大会「コミュニティ福祉と希望：私達はいかに希望をつなぎ、育めるのか」のコーディネーターを通じて、3学科に通底

する「コミ福」のアイデンティティを再考できたことは、今後の本学部の発展にもつながる仕事だったのではないかと考えます。

最後に、同期とのつながりです。私が入職した2013年度は、新しく採用された教職員が特に多い年でした。この同期の人たちと「若人（わこうど）の会」を結成し、学科を超えて親睦を深めました。段々と「同期以外の人」、「気持ち若人の人」と所帯が増え、やがて「普通の飲み会」へと会は発展していきましたが、友人として付き合える仲間として今もつながっています。

この他にも、プライベートでは結婚して子どもが生まれ、父になりました。また、学部・学科の先生方には何かと気にかけて頂き、講義科目の担当機会や原稿執筆の機会等、様々なチャンスも頂きました。恩師である森本佳樹先生との別れも経験しましたが、師から頂いた教えと引き合わせて頂いた人や地域を含め、5年間を通じて本当に多くの財産を頂いたのだなあと、今この原稿を書きながらその意味を噛みしめています。

Ⅱ. 5年間の任期中に「できなかった」こと

現在、私は東京通信大学人間福祉学部の助教として、引き続き、地域福祉に関わる科目、実習教育に関わる科目を担当しています。今年創設の大学で、実習教育のシステムに関しても試行錯誤の中、まさにイチから作り上げているところです。まだまだ慣れない所がありますが、新しい大学を教職員も学生も共に「1期生」として作っていただけること、通信制の大学ゆえに全国各地・多世代の学生と関わりが持てること、さらには主にインターネット（e-ラーニング）を通じた新しいスタイルによる講義・学生相談等、これまでとはまた別のやりがいや難しさを感じながら、変わらず教育・研究活動に動んでいます。

さて5年間の任期中に「できた」ことが、確実に今につながっていることを実感しますが、「できなかった」ことを挙げるとすれば、それは論文執筆です。特に個人的な「宿題」として、博士後期課程大学院在籍中に完成させることができなかった博士論文があります。これについては、開学1年目でまだ比較的時間に余裕のある今、書き進めたいと思います。

おわりに

冒頭にも触れたように、長い年月を過ごしたこのキャンパス、この場所には、特別な思い出があり、退職時は正直、ここから離れたい気持ちでした。ただ、学部創設から20年という節目に、共に成長してきた「コミ福」から離れ、新しい道を歩み始めたい思いもあり、「二度目の成人式」のような気持ちで、巣立ちました。ここまで育てて頂

いた人々、そしてこの学部への感謝を忘れず、どこにいても「いのちの尊厳のために」を貫ける「コミ福生」でありたいと思っています。

実は本学の兼任講師として、引き続き春学期「福祉ワークショップ」秋学期「社会福祉援助技術演習3」を担当させていただきます。その意味では巣立ちきれていませんし、今も新座キャンパスの近くに住んでいて、気持ちが落ち込んだ時や気合いを入れたい時は、校舎を眺めてから出勤しています（笑）。

これからも「いつでも帰れる」「背中を押してくれる」実家のような場所として、母校のありがたみを感じながら、今後の歩みの中で得るものを少しずつ本学部に還元していきたいと思います。引き続き、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。